

狹き門

——ルカ伝第13章22～30節——

小池辰雄

1977年9月4日

門に体当たり 十字架のキリストという狭き門 大道無門 今ここにおいて入らなくては 天門 キリストの中へと入れられる 生命賭けで私の中に入つてこなかつたやつは知らんよ 天国入りの路

【ルカ13・22～30】

²²イエス教えつつ町々村々を過ぎて、エルサレムに旅し給うとき、²³或人い
う『主よ、救わるる者は少なきか』²⁴イエス人々に言いたもう『力を尽くし
て狭き門より入れ。我なんじらに告ぐ、入らん事を求めて入り能わぬ者おお
からん。²⁵家主おきて門を閉じたる後、なんじら外に立ちて「主よ我らに開
き給え」といつつ門を叩き始めるに、^{あるじ}主人こたえて「われ汝らが何処の者
なるかを知らず」と言わん。²⁶その時「われらは御前にて飲食し、なんじは
我らの町の大路おおじにて教え給えり」と言い出でんに、²⁷主人こたえて「われ汝
らが何処の者なるかを知らず、悪をなす者どもよ、皆われを離れ去れ」と言
わん。²⁸汝らアブラハム、イサク、ヤコブ及び凡ての預言者の、神の国に居り、
己らの遂い出ざるを見ば、^{そこ}其處にて哀哭・切歎なげきする事あらん。²⁹また人々、
東より西より南より北より來りて、^{きた}神の国の宴に就くべし。³⁰視よ、後なる
者の先になり、先なる者の後になる事あらん』

●門に体当たり

今日は「狭き門」ということで、ルカ伝13章22節から。マタイ伝では、ちらほらしていて、ルカ伝の方がまとまっているわけです。マタイ伝の7章、25章のところをまとめると、ルカ伝の13章になるわけです。ルカ伝だけで結構です。

²²イエス教えつつ町々村々を過ぎて、
イエスは語りながら町々村々を過ぎて、

エルサレムに旅し給うとき、

これはルカ伝9章51節から19章27節までがエルサレムへの旅です。そのエルサレムの旅を非常に詳しく書いているのがこのルカ伝なんです。ルカというのは旅行記述者みたいで――



—使徒行伝がそうですから——非常に文学的に優れていますが。

²³或人いう『主よ、救わるる者は少なきか』
救われる者は少ないでしょうかと。

²⁴イエス人々に言いたもう『力を尽くして狭き門より入れ。我なんじらに告ぐ、入らん事を求めて入り能わぬ者おおからん。²⁵家主おきて門を閉じたる後、なんじら外に立ちて「主よ我らに開き給え」と言いつつ門を叩き始めたる後、主人こたえて「われ汝らが何処の者なるかを知らず」と言わん。²⁶その時「われらは御前にて飲食し、なんじは我らの町の大路にて教え給えり」と言い出でんに、²⁷主人こたえて「われ汝らが何処の者なるかを知らず、悪をなす者どもよ、皆われを離れ去れ」と言わん。

なかなか、キリストの言葉は強いですね。

²⁸汝らアブラハム、イサク、ヤコブ及び凡ての預言者の、神の国に居り、己らの遂い出さるるを見ば、其處にて哀哭・切歎する事あらん。²⁹また人々、東より西より南より北より来りて、神の国の宴に就くべし。³⁰視よ、後なる者の中へ、先なる者の後になる事あらん』

素晴らしい言葉ですね。これはぜひ、今日はしつかり学んでいただきたい。

「力を尽くして狭き門より入れ」

と。これは極めて大事な言葉のひとつです。大事な言葉は大体、簡単です。

「力を尽くして

というのは、全身全力です。「尽くす」んですから、余すところがないんです。「尽くして」

という日本語は素晴らしい。「尽力」という言葉がありますね。力を尽くす。

「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、主たる汝の神を愛すべし」

というキリストの言葉があります。一切をあげて、全存在をもつて、狭き門より入る。要するに、体当たりです。「体」というのはただ「からだ」のことではない。全存在です。

「体当たりせよ」

ということです。

「体当たりをもつて、狭き門から入れ」

と。門は狭い。狭いから何も持っていくわけにいかない。身体そのもの。無一物。無一物的全存在。それが「力を尽くして」ということです。

「自分はまだ力が少し足りないから、少し訓練してから力を尽くそう」なんて、そうじゃない。あるがままの自分をそのまま体当たり的に投げ入れること。投身、なげみ、捨身ということ。

「捨身の態勢で、投身の態勢で門にぶつかっていけ」



ということです。

「門を叩け、さらば開かれん」

とキリストが言われた（マタイ伝7章）。狭き門から入るんだから、「入門」するんだ。あなた方はこの集会に入門している方々です。入門というのは素晴らしい言葉だ。弟子のことと門弟という。門人という。漢字というのはいいね。私は漢字の熟語が大好きだ。どしどし使う。門弟、門人、門下生。皆さんは、そういう言葉をむしろ使つた方がいい。

「キリストの弟子」

という言葉があるが、「弟子」というよりも、「門弟」の方がいいな。門下生です。

そういう門に体当たりする。「狭き門」というのは、私がいつも言つているとおり、十字架という門です。キリストという門です。

●十字架のキリストという狭き門

なるほど今は、日本の試験地獄はみなこれは「狭き門」だ。

「だから、今の日本の受験体制はキリストの言葉にあつてゐるからいい」

なんて思つてはいかん。これは困る。方々でそんな狭き門で、非常にマイナスが多い。そういうことを言つているのではないですよ、この「狭き門」というのは。現実には、学生諸君は、なかなか狭き門で大変だ。いわゆる「狭き門」という言葉はここからきているんだけれども。

「富める者の天国に入るは、ラクダが針の穴を通る方がやさしい」なんてキリストが言われた。申し上げていており、

「針の穴」

といふのは、

「針の穴」という名前の狭き門

だつた。そこをラクダが通る方がまだやさしいという。あれも、「針の穴」は「狭き門」のひとつの中なんだ。いわゆる針の穴ではないですよ。

ところが、ありがたいことには、キリストという狭き門なんです。註解者がそこまではつきり言わない。註解書をみても、

「キリスト」という狭き門

とはどこにも書いてない。これは私が今言うところのもので、キリストという狭き門は、もつとはつきり言うと、十字架のキリストという狭き門です。

本当は、キリストという狭き門は誰でもが入れるんです。「いかに少ないか」ではない。キリストはここまで、

「これは私のことだよ」

と仰つてなけれども、私ははつきりそうとする。



「入らん事を求めて入り能わぬ者おおからん」
多いだうと。これは事実、多いんだよね。けれども、もうひとつキリストの言葉の奥を
さぐると、

「誰でもが入れるんだよ」

ということです。ところが、誰でも入れるということが、実は難しいんです。妙なものだね、
これは。誰にでもできることがむずかしいという。ということは、難しくしているのは、
こつちのはなしだ。キリストの側からいうと、もう何でもない。

「我（キリスト）、門の外にて叩く。開け。お前の心の門を開け」

という。心の門を、心門を閉じてゐるから、魂の門を閉じてゐるから、それでは入れない。
実は、キリストが入ろうとしている。

「狭き門より入れ」

ということを、もうひとつ別な角度からいようと、

「私はお前の中に入ろうとしている。なぜ、門を閉じるか。理屈を考えたり、自分がどうであるこうであるなんていうことを考えたり、そんなことはひとつも要らん。相対的な判断はひとつも要らん。私は無条件にお前の中に入つていこうとしているのに、なぜ、条件付けをやつていてるか」と。

と。默示録3章のあの言葉、

「私は戸の外で叩いているから、開けよ。私は入つていつて、お前と一緒にご馳走を食べたいと思つてゐる」

と。楽しいひとですよ、キリストというのは。よく、ご馳走のことがでてくる。イエスは、ケチ臭いひとではないんですよ。

「食を貪る者、酒を好む者」

なんて言われた。真似してはいかんですけれども。キリストは酒に呑まれないんです。ソクラテスもそうだ。だから、

「俺もひとつ酒を飲む訓練をしよう」

なんて、そんなことは要らんですよ。

「儀文は殺し、靈は活かす」

というが、そういう気合が大事なんです。

「門」はキリストでもあり、自分でもあつた。門扉、扉に全存在をもつてキリストの十字架にぶつかる。ぶつ倒れる。

そういう意味で、

「力を尽くして狭き門より入れ」

という。もう、これを聞いただけでも、力が来ちゃうです。全存在をもつてキリストという門の中に入るのだから、誰でもが入れるんです。無条件に入れる門なんです、この「狭



「き門」は。

「狭い門だから、これは大変だな」

なんて思つてはいかん。「狭い門」ということは、

「何も携えないで、無条件に、単身そのまま裸で入つて来い、体当たりしろ」

ということです。

実はもう、門は開かれていた。十字架という門は開かれていたことに気がつくだけの話なんだ。

「体当たりしてみたら、門は開かれていました」

なんてことです。

「体当たりして開かれる」

ということと、

「体当たりしてみたら、もう開かれていた」

という、この矛盾的な表現に本当の世界がある。本当の真理の世界は単なる平面論理ではないですから。分かりますか。

●大道無門

「ここにちょうど、「大道無門」と書いてある。

「大道無門」

千差路有

透得此閑

乾坤独歩

「大道無門、千差路有り。みち此の閑を透得すれば、けんこん乾坤独歩す」

という。

「力を尽くして狭き門より入れ」

というのは、入れるんです。全存在をもつてぶつかれば、キリストは無条件に入れてください。分かりましたね。十字架という門は、一切を贅つていて。

「過去も現在も未来も、何も心配は要らんぞ。今、この現実において、今ここにおいて、その中に入れ

と。そうしたらば、永遠の現実に入つてしまふんです。

こういうような気合は——今朝、NHKテレビの宗教の時間で仏教の話をしていたが——いわゆる仏教の「縁起」なんていう悟りの世界とは違う。活ける靈法の世界だから。私はあれを聞いていて、仏教の人は氣の毒だなと思った。大変だ、あれは。まあ、あんまり大変だもんだから、法然や親鸞はもう

「南無阿弥陀仏」



になってしまった。あれはいいよ。福音は実に簡単で、しかしながら、その中に入ると、無限無量なものが展開を始めるから。行き詰まつたつていいじゃないですか。行き詰まるところの凄いことになるんです。いいですね。

²⁴ イエス人々に言いたもう『力を尽くして狹き門より入れ。我なんじらに告ぐ、入らん事を求めて入り能わぬ者おおからん。

「だけれども、実は誰でも入れるよ」

とまでは、キリストは言わないんだ。ダメだね、キリストは——「ダメだ」なんてキリストのことを言つてはいかん。ひどいね、私は——イエス・キリストは本当は、「私に来なさい。私という門に来なさい。誰でも入れてやる。なぜ、尻込みしているか」

と言う。それが本当の祈りなんですよ。そういう態勢で入つていくことが祈りなんです。自分自身を祈り入れる。祈入するんです。まあ、青年諸君がこういう世界に今から入つたら、えらいことになるよ。

●今ここにおいて入らなくては

²⁵ 家主おきて門を閉じたる後、なんじら外に立ちて「主よ我らに開き給え」と言いつつ門を叩き始めんに、主人こたえて「われ汝らが何處の者なるかを知らず」と言わん。

「家主」というのは、神・キリストのことです。これは具体的にはキリストだよ。「私がおきて門を閉じた後、お前たちは外で、「主さま、私たちに開いてください」と言いつつ門を叩き始めん。もう遅いよ、その時に叩いたつて。門が閉じてしまつてから叩いたつてダメだよ」と。

「まあ、仕方がない。明日くらいに、信じましよう」

なんていう人は、門が閉じてしまつて、明日はダメだよ、入れない。今日、今ここにおいて入らなくては。

宗教の世界は即刻の世界です。即の世界です。「信ずる」とは、直ちに行動する世界です。「信は行なり」と言つたのは、そのことなんです。

「信仰によつて義とされる」

と言つけれども、「しんこう」は、信即行の「信行」だ。「信する」とは、全存在をもつてその中に入ることが「信する」ということ。全存在をもつて受けとることが「信する」ということ。それは内的行為、一番根源的な行為なんです。いわゆる心理的なものではない。全存在なんだから。心ではないんだから。もう、私はこんなことを言つていると、異言が



出そうで困るんだよ。

なぜ、私にこんなに力が来るんでしょうね。それは上から、語っているうちにやつてくら仕方がない。あなた方も、聞きながら、その中に入つているかね。頭で聞いていてはダメだよ。

もうとにかく、いろいろね、人間は相対的な問題や課題があるでしょう。そんなものはこの日曜日の集会の世界では突き抜けないと。そうしたら今度は、現実に突き抜けることができるでしょう。何のための集会か。私は決してお説教なんかしているのではない。あなた方も、聖書の研究なんかしているんじやない。研究なんかやつたつて、何年やつたつ入れはしない。ギリシア語やヘブライ語を勉強したつていいよ。けれども、そんなものが鼻にかかるつているうちはダメです。

「私は日本語だけでいくよ」

と。いいよ、それで。そのかわり、その背後の世界、根源語が読めれば、ギリシア語やヘブライ語ができるよりかはるかに素晴らしいことになる。こんなことを言うやつがあるのかね、他に。ギリシア語やヘブライ語ができる人はそういうことが言えない。私たって、ヘブライ語の皮きりの男だけれどもさ。ヘブライ語を3年間、若い人たちに教えた。無教会時代に私が皮きりをやつたんですよ。けれども、そんなことでどうのこうのではないんです。

『主よ、我らに開き給え』と言つて門を叩いても、私はお前たちがどこから来たかを知らない』

なんて、そらつとぼけたことを言つてゐる、キリストは。

「どこから来たか知らんよ」

なんて。愉快だね、キリストの言葉は。イエスというひとは、何か整つた人かと思つたら、そうではなかつた。

「俺は知らんぞ」

と言う。顔を見れば分かるんだけれども、それでも「知らんぞ」なんて。

「求むべき時に求めず、聞くべき時に聞かないから、もう門を閉じた後から來たつてダメなんだ。天国行きはお断りだ、地獄行きだ」ということです。

『明日、明日。今日ばかりではない』と、すべての怠け者は言つてゐる』

というドイツ語の諺がある。これは何も勉強のこととかぎらない。天国の世界も正にそくなんだ。毎回、毎日、今ここに、という世界。信仰は、

「今直ちに」

という世界です。条件が付くなら、「今直ちに」はできないよ。

「もう少し聖書を読んでから、もう少し人を愛してから」



とか、そうじやない。人間の側の相対的な善悪なんてことではない。環境の良し悪しといふことでもないんだ。いいですね、その気合が分かつたですか。

●天門

そうしたら、

²⁶その時「われらは御前にて飲食し、なんじは我らの町の大路にて教え給えり」と言い出でんに、

「あなたの前で一緒にご飯を食べたり、コーラを飲んだりしました。辻説法していらっしゃるのをうけたまわりました」

と。いくら近くにいても、いくら同じ釜の飯を食べても、いくらただ説教を聞いても、それは何も本当に受けとつていないのでないかと。

キリストの直弟子たちが実はそれだつたんです。全然そうだとは言い切れないかもしだよね。門弟なんだ。だからいかと思つたら、みんなキリストに躊躇してしまつて、散り散りになつてしまつた。けれども、キリストは彼らを選びましたから、

「祈つて待つていろ。私は十字架にかかるから、昇天してから、お前たちのこところへやつてくる。聖靈をもつてやつて来るから。そうしたら、私が言つたりしたやつになつてしまつた。けれども、キリストは天下の大道です。それまでは、つかんだような顔しているけれども、ダメだぞ」と。これが、申し上げているとおり、

「十字架と聖靈は離すことができない」ということです。十字架という狭き門なんだ。

「大道無門」というね。キリストは天下の大道です。

「我は道なり、生命なり、真理なり」

という。「真理」とは、これは頭の真理ではないですよ。真理というのは必ず実現するところの真なるもの。これが真理です。真理という言葉が蹠きになる。「道」は、いつも申し上げているとおり、日本人が本当は持つていた世界なんです。茶道、弓道、剣道、柔道、書道、画道。道なんだ。

キリストは天下の大道なんです。そこには門がない。世にはカトリックの門、プロテスタントの何々宗派の門、無教会の門がある。無教会は本当は無門だよ。けれども、その無門にまで徹しないから困つたな。「無教会主義」なんて言うから。内村鑑三先生は本当はそんな人ではなかつたんだ。内村先生の精神がだいぶ歪められてしまった。内村鑑三は聖靈の世界が火花していた。

「それを常燃の火に、お前たちは燃やせ」



とまで、先生は仰らなかつたけれども、そこをやらなくてはいけないんだ。

大道。どうですか、あの旧約聖書のヤコブ。ヤコブがお嫁さん探しに出かけていった。

その途中で石を枕にして寝たら、夢をみて、天から梯子がかかつてた。ここが天の門であつた。天門であつたという。地上には何も門がない。けれども、そこに天門が開けていた。至るところこれ天門あり。無門であるからこそ、至るところに門があるんです。

「原始福音」とか、やれ何とか「幕屋」とか——私が一番先に「幕屋」と言つたんだけれども。だから、「武藏野幕屋」という歴史的な名前は今でも使いますけれども——「召団」と言おうが、「エクレシア」と言おうが、どうだつていいです、そんなことは。私は名前なんかにこだわつてない。

これは老子と同じで、無名の世界です。「名無き名」という。あまり、私がケタはずれなことを言うものだから、あなた方は目を丸くするかもしれないけれども。

そういう天門です。至るところ門。だから、大道無門。キリストという狭き門は、実は至るところでもつてこれに入れるところの、誰でもが入れるところの、無条件に入る門である。いわゆる

「どこの集会でなければならない」

なんていうような門ではない。その点では、無門である。無門の真門、というんだ。無門が本当の門だ。「真門」なんて、今私は初めてここで使う——こんな言葉は使わなくていいですよ——要するに、キリストという門ということははつきりおぼえてください。

●キリストの中へと入れられる

そして、十字架のキリストという門に入ると、そこは活けるキリストの世界に入る。活けるキリストは即ち、聖靈の御靈のキリストである。これは、

「われキリストと共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず。キリストわがうちに在りて生き給うなり」

という世界と同じことです。

さつきの「縁起」の話で、死の話もしてたよ、なんか情けないような話を。死を、ある意味において「悟り」で乗り越えるような話だけれども。

「われキリストと共に十字架せられたり」と、パウロが言つたときにはもう、

「私はもう死んでいる者だよ。律法も罪もサタンも陰府も、これには私は関わりない世界に入つてしまつている」

という。これを「死者」と言おうが、「無者」と言おうがいい。無き者です。

「無者」

というのは本当に



「私の無い」

という意味と、もう一つは、
「無き者」

というような意味でいうと、非常に逆説的な言い方をすれば、それが本当に在るものなんだ。

白隱のおもしろい歌がある。

「若い衆や死ぬがいやなら今死にやれ　ひとたび死ねばもう死なぬぞや」

「若い衆や、やがて死ぬのが嫌なら今死んだらよからう。一度死んだらもう死なないよ」

と。白隱のこの言葉はガラテヤ書2章20節と同じなんです。

「キリストと共に十字架されてしまつて、私はもうこの世には死んだものです。ところが、私は生きてます。もう死にません。『キリストわがうちに在りて生き給うなり』と、永遠の生命がわがうちに在りて生き給う。もう、相対的な死なんていふものはもはや乗り越えてしまいましたよ」

と。白隱の気魄はそこにあつた。それはひとつ禅的な悟りの氣合でしようけれども、私たちは、もうキリストの十字架という絶対恩寵の世界であつて、死も永遠の生命もいわゆる悟りでなくて、実に最大の易行道です。易行道だけれども、この易行道が、逆説的にいうと、むずかしい。問題は本当にそこに入つていいから。本当に受けとつていけばいい。

「本当に受けとる」

というのは努力ではないですよ。向こうが私たちに靈的な事実をもつて迫つて与えているから、ただそのことに気がつけば、豁然としてその世界に入れる。気がつけばいい。努力ではないんです。気がつけばいい。目がさめれば。

「我が眼より鱗うろこの如きもの落ちたり」

という。パウロはダマスコ途上で靈撃されたけれども、我々は靈撃されないで済んでしまつてゐる。キリストは既に十字架でもつて道を備えている。

「はいっ」

と無条件に受けとる。無条件に「はい」と。その「はい」が本当に全存在的な「はい」になつてごらん。もうそうしたら、聖靈の世界に入つてしまふ。何かしらんが、もの凄い力の世界に入つてしまふ。それが御靈の世界だ。

「われ汝のうちに」

という。キリストは、

「私はお前のうちに入るよ。お前は、私が全部引き受けてしまつたんだから、入つてこいよ」

と。だから、パウロが

「われキリストのうちに、キリストわが中に」



と言う。あの「の中に」という状態の前に、「エイス」「の中へ」と入る。中へとバプテスマする。

「中へと入る」

ことは、逆に言うと、

「中へと入れられる」

ことなんです。受け身でいい。

いいですね。それがその「狭き門」なんです。「狭き門」なんていう言葉が躊躇になるから、困るけれども。実は、万人を迎えているところのキリストという門。そしたら、その先は広々とした世界である。広大無辺の世界である。狭い世界ではないですよ。

●生命賭けで私の中に入つてこなかつたやつは知らんよ

少し話をずらして、若い人たちに言うけれども、まあ、学校を出るまでは大変だよな、試験を通らなくては。けれども、私は学校でいつも

「天賦天職」

ということを言つてゐるんだ。これを本当にみんな受けとつていないらしいね。

「ああ、あれは『この道を往く』という本に書いてある」

なんてなことで、おしまいになつてゐる。そして、棚にあげてゴミになつてゐる。大体、わかつてゐる。本当にあれをカバンにいれて、時々電車の中で読むような生徒がいるかいなか知らんよ。私は、一行一行を魂をこめて書いたんだけども。お父さんもお母さんもあまり読んでないようだし、もういい加減に学校をやめようかな（笑）。

天下から賜つた才能がみんなあるんだ。手仕事が好きな人は大学なんか行かなくていいんだよ。手仕事人のところに弟子入りする。天から賜つた素質が何でもその人にある。ドイツの青年はかなりこの自覚をもつていています。だから、ギムナジウムを出ても、大学へ行こうとしないんですよ。

「私は大学のコースではありません」

と。ドイツ人というのはそういう自覚のしつかりした国民です。アメリカの真似するよりか、やつぱりドイツを学んだ方がいいですよ、相対的な意味で。そういう賜つた、その人でなければならないことがあるんだよな。ナスはナス、キュウリはキュウリなんだ。ナスにカボチャになれと言つたつてしまふがいい。私に絵を書けと言つたつてしまふがいい。私に彫刻せよと言つたつて、これはしようがないんだ。

天賦、そこに天職がある。これは本当の意味において、「狭き門」なんです。自分の行くべき道は細い路、細路なんだ。隘路みんな一人ひとりにその人でなければ通れない隘路があるんだ。それは天路と言つたつていい。

「天路歴程」



なんていう言葉があるけれども。各々の足で歩く路。自分の天性はここにあるから、それいまつしぐらに、それを中心にして行けと。あの『この道を往く』の中に兼好法師の『徒然草』^{つれづれぐさ}の第一八八段のところを私は引用しておいた。

「ある一つのことに打ち込め。その他のことを顧みるな。ひとに何と思われたって

構やしないんだ」

と。あの兼好法師は愉快な男だよな。その通りです。いわゆる試験に及第しようが、及第しまいが、人生の本当の試験の勝利者となれど。大学なんか入らなくたつていいんだよ。今の大學生は台無し学だからね。

D学校は医科系統が多くて困ったね。そうすると、友だちが医科だと、何だかしらないけれども自分も医科に行こうなんて、冗談じやない。それぞれの特色をもつて行く。むしろ人の行かないようなところへ行きなさい。天文学でも何でも。

自分の隘路を切り開いていく。

「私はこれで自分の本質に本当に即した歩き方をするんだ」

と。どんな艱難でも、それは突破します。そして、それが知らない間に本当の意味で、社会に貢献することになる。本当にですから。人真似はいらん。三谷先生の

「汝自身たれ」

というあの文章は私は大好きだ。狭い意味で自分に執着する意味の「汝自身」ではないですよ。

「本当に天から賜つたその汝の本質に即して行け。それを磨きあげて鍛えて行け」ということです。これが狭き路なんだ。ところが、それが実は、天下の大道に即する。大道即細路、細路即大道ということになる。

この花はこの花らしく咲いている。このリンドウはリンドウらしく咲いている。どっちも人真似していない。それで百花繚乱で素晴らしい。みんなバラだつたらしようとしない。キリストの中に入ると、天下一品のその人らしさが現れてくる。類型的ではない。いわゆる全体主義なんていうものはダメですよ。交響楽が、みんな太鼓だつたらどうする。みんな笛だつたらどうする。いろんな音がハーモニーをなして大交響楽になる。我々の実存がそのようにして大交響樂をもつて、実存をもつて神を讃美する。いいですね。そういう在り方に徹してくださいよ。そうしたら、力ができるから。人に何と思われたって、そんなことは問題じやない。

だから、キリストは、

「生命賭けで私の中に入つてこなかつたやつは、今頃そんなことを言つたつてどうにもならんよ、知らんよ」

と言うんだ。本当にそうだね。

「一日一生」



とは内村先生の言葉です。

「一日は千年である」

とはペテロの言葉です。

あのプロ野球の王という人も非常に努力したそうだ。しそつちゅう自分を鍛えている。みんなが大騒ぎしても、王は騒がない。彼は三振してみたり、ゴロを打つてみたり。けれども、「この球」と思った時は打つんだよな。第一球であろうと、一球であろうと、「この球」と思った時に打つのが本当の打ち方なんです。

「まあ、第一球はストライクでもはずしておけ」

なんて、そういう在り方ではダメです。一球一球に、自分が「この球」と思つたら打つ。そうしたら、必ず行くんです。その気合。球とバットと自分が一つにならなけダメです。私は今、バットを振つたら、おそらく私の中学時代よりか当たると思つてゐる。私は野球が好きで、ピッチャーやショートをやつていたから。コントロールはいいよ。今はスピードはちょっとダメだけれども。

何を見ても、そこに何か真理がこぼれていいたら、それを身につけなくてはいかん。みんなと一緒にただ騒いでいたつて、大騒ぎだけだ。

D学校にも大ピッチャーがいたんだ。内村鑑三先生の息子、内村祐之（1897～1980）。精神医学の大家です。あれが学校時代に平均点が98点。空前絶後です。一高でピッチャーをしていて。私は西片町に住んでいて、兄貴が一高だつたから、連れられて、ピッチングを見に行つた。今でも目に映るね。あの顔といい、姿といい、そのカーブ、ドロップの鋭さといい。慶應も早稲田も明治も五大学は全部、一高にゼロ敗してしまつた。一高黄金時代という「野球界」という雑誌があつたが、あの雑誌をとつておけばよかつたな。家をたたんだ時にどうかなつてしまつた。今もその雑誌の表紙が浮かんでくる。あの内村さんは大変なピッチャーです。そういうピッチャーがいたんだよな。とにかく、何でもいいですから、打ち込んでくださいよね。また、高等学校の朝礼ではつきり言つてやるかな。

●天国入りの路

²⁷主人こたえて「われ汝らが何処の者なるかを知らず、惡をなす者どもよ、

「皆われを離れ去れ」と言わん。

「惡をなす者どもよ」

だつてき。結局、本当のことをやつてないお前たち——まあ、キリストはその時、

「惡をなす」

と仰つたが——求めるものを求めていなかつた者たち、体当たりしなかつた者たちということです。

体当たりすれば、自分も驚くような世界に入つてしまつて、



「やつぱり、これは本当だつた」

ということになる。いわゆる、頭でもつて分かつたの分からぬのという、そんな世界でないということをはつきりと全存在で受けとる。そういうことから違うのを、私はのをキリストは夢みていたか。

「異なる福音」

といふところで言つたわけだ。ローマ法王を頂点としてピラミッドみたいなカトリック。職制構造をもつた——「ヒアラルヒー」というんですけれども——あんな在り方というものをキリストは夢みていたか。

要するに、

「お前たちはもう関わりがない」と言われてしまつた。

²⁸汝らアブラハム、イサク、ヤコブ及び凡ての預言者の、神の国に居り、已らの遂い出さるるを見ば、

「あなた方はイスラエルの血統のユダヤ人だと思つてゐる。だから天国に入れると思つても、どつこい、そうはいかんよ」

と言うんだ、キリストは。今のユダヤ人は、どうして、こういうところをはつきり読まないんだろう。なぜ、ユダヤ人たちは新約聖書を読んで、

「俺たちは間違つていた」

と言わないのか。私は、何も原始福音の人たちの悪口は言いたくないけれども、あの人たちの氣持の或る点は分かるけれども、ただもう直接的に彼らと結んでみても、果たしてそれが本当のことかと思う。一線を画すべきところは、はつきり一線を画さなければいかん。それは結局、キリストを、パウロを迫害し、キリストを十字架にかけた。

イエスのこの言葉は、

「今、私を本当に受けとることが、アブラハム、イサク、ヤコブおよび預言者たちの、本当に神に信じ入った人たちの、あとを本当に繼ぐことなんだ」

ということをキリストは言わんとしているのに、それを受けとらないから、

「お前たちは天国に入れない」

と言われる。お前たちは天国から追いだされると。

己らの遂い出さるるを見ば、其處にて^{そこ}哀哭^{なげき}・切歎^{はがみ}する事あらん。

「その時はもう遅いよ。いや実は、門の外で言つてゐるのはもうその事態なんだよ。

私という門があるじゃないか。なぜ、この門の中に入らなかつたか」ということです。

²⁹また人々、東より西より南より北より來りて、神の国の宴に就くべし。^{きた}視よ、

後なる者の先になり、先なる者の後になる事あらん』

逆に今度は、東西南北からやってきて、異邦人たちが神の国の宴につく。



「異邦人たちが先に天国に入つて、お前たちユダヤ人は悔い改めない限りダメなんだ、後になつてしまふぞ」と。

「後なるものは先に」

とはそのことです。長いこと教会通いしていても、何も本当の世界に入らない。ところが、本式に受けとつた人は——十年やついてもダメなんだ、ところが——特別集会に一遍来たら、その中に入つてしまふ。これは「後なる者は先に」ということ。

「先なる者は後にならん」

という。

相対的な伝統とか、血統とか、そんなことが問題ではない。各人が神に直結する。

「各々の時代は神に直結する」

とランケが言いましたが、誰でも各人が神・キリストに直結する。これが本当の天国入りの路なんです。

「先祖にアブラハムがいたから、親父が信仰があつたから、私も入れる」とはいかない。

「血肉にあらず」

というものがそのことです。信仰の世界は、神の国は血肉にあらず。各人がそれぞれ本当に入る。

そういうことで、「狭き門」とはキリストのことです。ところが、これは誰でもが入れる。無条件に。こんな有難いことはない。だから、絶対恩寵です。そうしたらば、その先は、もの凄い広々とした、詩篇23篇のごときもの。そして、何をやつても今度は、自分の与えられた狭き路を突走れば、それが天下の大道であつたということになる。いいですね。そういう気合でやってくださいよ。

そうしたらば、それは台風の目みたいなものです。台風というのは風がどこから来るのかわからぬ。グルグル回っているものだから。そのように、回りにもの凄い風を起こし、波紋を起こして行く。一切を動かしていく。そしてまた、周辺のものはどんどんその中に取り入れられてしまう。何を読んでも、見ても、聞いても、全部それが血となり肉となってしまう。そういう中心がある。中心のある人は広くなる。深い人はまた高くなる。狭い人は広くなる。こういうことなんです、福音の世界は。

どうぞ、そういうことで行きましょう。パウロが言つている焦点は、贖罪の十字架との永遠の生命、愛の生命をもつた聖靈です。そこには、知恵も力もいろんなものが働いてくる。では、今日はこれでおしまいといたします。

